

東日本支部だより

2009年3月5日発行

Newsletter of the East Japan Chapter, the Society for Research in Asiatic Music

定例研究会のお知らせ

5. 日本の古代律令社会における音楽の位置づけ 養老律令の記述から

浅田 剛史(洗足学園音楽大学)

東日本支部第42回定例研究会

時 2009年3月14日(土)午後1時30分~4時30分
所 東京芸術大学音楽学部 1-3-30教室
(JR上野駅公園口または地下鉄千代田線根津駅下車)

2008年度 修士論文発表(その1)

1. 新作能における音楽技法 能管を中心に
安納 真理子(東京芸術大学大学院)

2. 音楽体験としての唱歌の受容 1920年代生まれの高齢者の語りと音楽実践を通して

重田 絵美(東京芸術大学大学院)

2008年度 卒業論文発表(その1)

1. 固有の土地を離れた芸能の受容 川崎を中心とした沖縄芸能 芸能研究会に見る

小金井 麗花(国立音楽大学)

3. 中国琵琶の教習プロセスに関する再検討 音楽専門教育を中心に

劉 丹(東京芸術大学大学院)

2. 民間における雅楽活動 振興・普及活動と新作活動を中心に

遠藤 明日香(国立音楽大学)

司会 高松 晃子(聖徳大学)

3. 藤沢市における「遊行の盆」 踊り念仏から生まれた創作盆踊りをめぐって

石井 愛(東京芸術大学)

東日本支部第43回定例研究会

4. 幼稚園で歌う仏教讃歌の今 讃美歌との比較を通して

柳本 春香(東京芸術大学)

時 2009年4月4日(土)午後1時30分~4時30分

所 お茶の水女子大学 共通講義棟2号館102教室

(地下鉄丸の内線 茗荷谷駅下車 徒歩7分)

* ご来校の際は身分証明書をお持ちの上、正門をご利用ください

2008年度 卒業論文発表 (その2)

1. 日本における京劇受容史研究
品川 愛子(東京芸術大学)
2. 潮来節の旋律比較と分析 はやり唄の流行と伝播
角 優希(武蔵野音楽大学)
3. 善光寺木遣りの伝承について 善光寺木遣り保存会と
女性との関わりから
田中 佑美(お茶の水女子大学)
4. 合唱におけるピアノの使用と役割の変容 全日本合唱
コンクール全国大会からの考察
黒澤 幸子(お茶の水女子大学)

2008年度 修士論文発表 (その2)

1. 水戸の洋楽事始
堀江 洋子(放送大学大学院)
2. 日本における「ワールド・ミュージック」の受容
遠山 香織(東京芸術大学大学院)
3. 陽音階と長唄における三音旋律
宮内 基弥(東京芸術大学大学院)

司会 岡崎 淑子(聖心女子大学)

定例研究会の報告

東日本支部第40回定例研究会

時 2008年12月6日(土)午後3時~5時30分

所 東京芸術大学音楽学部 H412 教室

司会 早稲田みな子(東京芸術大学)

研究発表

1. 社会史としての芸能史 石垣島エイサーの系譜を探る
塚田 健一(広島市立大学)

(発表要旨)

本研究発表は、石垣島石垣市西部の双葉地区で行われているエイサー(以下、双葉エイサー)がどのように当地に伝えられたかを詳細に検討し、その伝播の社会的経済的背景を明らかにすることによって、双葉エイサーの伝播過程を社会史の一過程として記述することを目的とする。

双葉エイサーは、沖縄本島からではなく、与那国島の久部良集落から伝えられたとの伝承が当地では有力である。しかし、現在の双葉エイサーと久部良エイサーを比較すると、前者が男女混合の太鼓踊りであるのに対して、後者は男による太鼓踊りと「はたき」をもった女踊りからなり、テンポも前者が後者の倍近く速いなど、芸能が著しく異なる。しかしながら、両集落の伝承内容の一致および当時の双葉エイサーの写真による芸能の照合などから、1968年頃、与那国島久部良在住の青年漁師 A 氏が当地のエイサーを双葉地区に伝えたことが判明した。またその後の調査によって、両集落のエイサーの現在の芸能の相違は、じつは 1987年に別系統のエイサーが新たに双葉地区に導入されたことによるものであることが明らかとなった。石垣市の舞踊家 B 氏が勉学

のため愛知県に滞在していた際に豊田市で行われていたエイサーを習得し、帰郷して双葉青年会に豊田エイサーを移植したというのが、現在の双葉エイサーの由来の真相である。調査によると、この豊田エイサーはじつはトヨタ自動車に就職した沖縄出身者のC氏とD氏が中心に行っていたもので、沖縄市字登川のエイサーを豊田市に移植したものであった。したがって、双葉地区には二度にわたって二つの伝播経路でエイサーが伝えられたことになる。すなわち、(1) 与那国島久部良集落(久部良エイサーは沖縄本島読谷のエイサーの系統といわれる)から石垣島双葉地区へ、(2) 沖縄市字登川から愛知県豊田市を経て石垣島双葉地区へ、の二経路である。

本発表では、これらの伝播を成立させた4人の「芸のキャリアー(運び手)」の移動を社会経済的要因から、すなわち、A氏(双葉を経由して本土へ移動)とC氏の移動は高度経済成長期における沖縄地域から日本本土への労働力流出の増加推移に、B氏の移動は本土復帰以降の沖縄の若者の本土就学者数の増加推移に、D氏の移動は1980年代のトヨタ自動車の生産台数・雇用者数の増加推移にそれぞれ呼応するものであることを数量的なデータの提示によって示した。

(コメント・マツ・ギラン)

八重山地方は沖縄県内でも伝統芸能が盛んな地域として知られているが、同地域で伝承されるエイサーは、沖縄本島から近年伝わったことから、これまであまり研究されてこなかった。本発表では、双葉(石垣島)と久部良(与那国島)の二つのエイサー隊を対象に、それぞれの音楽要素の相違点と、近年の社会史との関連が指摘された。双葉エイサーは、元来久部良エイサーを基に創作されたが、1980年代後半以降、沖縄県から日本本土に出た少数の出稼ぎ労働者に

より、新たに別の形で八重山に輸入された。要約すると、地域の伝統芸能において、「芸のキャリア(carrier)」としての「個人」の重要性が強調された発表であった。

質疑では、双葉エイサーの変容についての地域住民の意識が取り上げられ、変容よりも伝統に重点が置かれていることが論じられた。また、復活の際になぜ元メンバーのエイサーを参考にしなかったかという点について、塚田氏は芸のオーガナイザーとキャリアの区別を指摘し、再び「個人」の重要性を強調した。

2. 地方の舞楽 隠岐国分寺の蓮華会舞を中心として

加納 マリ(武蔵野音楽大学)

(発表要旨)

2006年3月に、大阪の国立文楽劇場で、特別企画公演「古代国分寺舞楽の系譜」と題して、四天王寺舞楽と隠岐国分寺蓮華会舞の共演が行われた。四天王寺に伝承する舞楽はかなりの数にのぼる。一方、隠岐では江戸時代までかなりの数の舞楽が奏されていたと伝えられるが、明治のはじめに一度途絶えたあと7曲のみが復活され、今日にいたる。2006年には隠岐の7曲に対応する四天王寺舞楽がとりあげられ、対比的に上演された。隠岐の蓮華会舞には「行道」「菩薩」「獅子」の曲目が残っており、これらが四天王寺の舞楽法要で行われていることを考えると、四天王寺の舞楽との密接な関係が想像できる。山形県・新潟県・富山県・静岡県など舞楽を伝える寺院や神社にはこうした演目が今日まで伝わっているところは少ない。また、舞楽法要として仏教行事の中に舞楽が取り込まれている例は山形県の慈恩寺に見られるが、ここでは「菩薩」や「獅子」などの伎楽の系統の舞楽は行われていない。

それだけに、隠岐の蓮華会舞のもつ特異性が浮かび上がってくる。隠岐は平安時代から鎌倉時代初期にかけて小野篁、後鳥羽上皇、後醍醐天皇などが配流にあったところであり、都とのかかわりは深く、文化的な影響を受けたことは否定できない。四天王寺からの直接の伝承を示すものは残っていないが、江戸時代の地誌には「平安時代から舞楽が行われた」と書かれている。

今回は2002年の調査をもとに、隠岐の蓮華会舞の特徴や特異性などを取り上げた。「行道」(道行で舞はない)「眠り仏」「獅子舞」「太平楽」「麦焼舞」「竜王の舞」「山神・貴徳」「仏舞」「入れ舞」(終わりの道行で、舞はない)のうち、「行道」は「振鉦」、「入れ舞」は「長慶子」にあたとされ、いずれの舞にも登退場の音楽として「眠り仏」の音楽が奏されること、曲の終わりが定型化されていること、農作業を模した舞振りがあること、楽器として笛・大胴(鉦打太鼓)・妙鉢(銅鉦)の3種が使用されることなど。こうした特異性から伝承経路の追究をさらに進めたい。

隠岐の国分寺本堂は昨年2007年2月火事で消失し、蓮華会舞は行われなかったが、幸いにも消失した装束、面などが復元され、今年は本堂の跡地で見事に復興したことは喜ばしい。

(コメント・鳥谷部輝彦)

発表内容の殆どは先行研究の中に留まった。新たな知見は、2007年2月に本堂が焼失し、同年は蓮華会舞は行われず、翌2008年は本堂前ではなく本堂跡地で行われたとの報告であった。配布資料の「資料1 おもな地方の舞楽 所在地」には、名に「舞楽」が付く民俗芸能のうち主要な例(大日堂舞楽、林家舞楽等)が示された。質疑応答では資料1について、諸例が日本海側に集中している理由が問われ、太平洋側には主要な例は殆ど残っていないからだと答えた。

発表者の研究目的の一つは資料1の諸例に共通性を見出すことであり、その前提として舞楽系統の民俗芸能のすべてが四天王寺舞楽に由来すると考えている。歴史、文化財指定の経緯、舞振等を考慮すると、その前提は細かく検討するべきである。今後の研究方向は、近隣の高田神社舞楽(水原渭江の研究による)や多武峰延年(本田安次の研究により、6月15日蓮華会に行われ、管絃、延年舞等があったと知られる)との比較、非楽家が舞楽を伝承する経緯の解明等があるだろう。

東日本支部第41回定例研究会

時 2009年2月7日(土)午後2時~4時30分

所 東京芸術大学音楽学部 H412 教室

司会 熊沢彩子(東京芸術大学大学院)

研究発表

1. 工尺譜の起源をめぐる - 唐の文字譜との関係 -

スティーヴン・G・ネルソン(法政大学)

(発表要旨)

工尺譜とは中国の近代における伝統的な記譜法である。「合四一上尺工凡六五乙」の10字が、歌曲や器楽曲に共通して広く用いられてきた。西洋のドレミ音階(移動ド)と同じく、階名として音高を相対的に表すのが基本的な用法だが、場合によっては固定ドのドレミ音階と同様、特定の絶対音高に結び付き、それを表すこともある。工尺譜の先駆的なものは北宋(960-1127)に見られ、その起源は唐代の文字譜、中でも管楽器(箏、横笛)の譜にあると言われてきた。しかし、このことを具体的

に立証しようとした研究(左継承「日本の箏楽譜と中国の工尺譜との関連」『東洋音楽研究』56、1993年)は、箏楽の文字譜について当然見るべき史料(『口遊』(970年)等)及び関連性の強い方響関係の史料を取り上げておらず、説得力に乏しい。今回の研究発表では歴史的な視野をできるだけ広くして工尺譜の起源について改めて考えてみた。

従来知られているように、横笛と箏楽の譜字とその順序が一部工尺譜に一致する。横笛では「上^{シヤク}タ六」が工尺譜の「上尺六」の相対関係に一致し、箏楽では高音域の「四一上」および低音域の「工凡六」という譜字の並びが、工尺譜の「四一上尺工凡六」にも見られる(1箇所のみ相対関係が半音異なる)

『教訓抄』以下の日本の楽書類には、方響の譜字や音高に関する記述がある。方響(日本の史料では「方磬」が多い)は奈良時代までに日本に伝えられたが、後に絶えたらしく、院政期になって改めて北宋との貿易の中で伝来したと思われる。『続教訓抄』・『體源抄』が「魏奇」なる人物の伝承として挙げる方響の譜字一覧のうち、「合四一上赤工凡六五」が工尺譜の「合四一上尺工凡六五」と同じ相対関係にあり、しかも魏奇の方響譜字に併記されている笙譜字の絶対音高から、方響の譜字と横笛・箏楽の譜字とが対応する場合には同じ音高を有していたことが読み取れる。

北宋の史料として、陳暘『樂書』(12世紀初頭)^{ヒチリキ}の箏楽指図の譜字(「合四一上勾尺工凡六五」)、及び沈括(1031-95)の『夢溪筆談』に詳述されている「燕楽」の「字」についても考察した。その結果、一部に齟齬が見られるものの、次のように考えるのが妥当と結論付けた。北宋で多くの楽器に(たぶん声楽にも)共通する記譜体系が用いられるようになり、最初は絶対音高を伴っていたが後により自由になり、工尺譜となった。その起源はやはり唐代の管譜 箏楽もしくは大箏楽の譜 にあると推測される。唐代の箏楽・大箏楽の文字譜は単なる

奏法譜(指孔譜)ではなく、すでに音高の概念を含んだ記号として捉えられ、その捉え方自体が工尺譜の発展を促したとも考えられる。

(コメント・蒲生美津子)

雅楽譜の譜字の起源と変遷について、中国資料と日本資料を縦横に使って論じた研究発表。2008年10月19日に二松学舎で行った氏の発表「文字譜の歴史」のうち、時間の関係で発表できなかった論題で、発表時間50分、質疑10分。A3 両面配布資料(発表進行、譜字表、文献資料一覧)と画像を示しながら論じた。画像には、氏の資料判読の結果や氏の思考過程を示す重要な画像が含まれていた。

発表では、奏法譜から音高を含む工尺譜への発展を説くにあたって、方磬の伝来と歴史、方磬の譜字と管譜字との関係、箏楽と大箏楽の音域を論点に据えたところに、発想の獨創性があった。とくに、方磬の16枚の板配列を明示して、教訓抄陳暘樂書等資料の譜字記載に2系統あること、譜字「合」の音高は、岸辺説「洋楽階名のド」ではなく、2律高い「d」であることを指摘したことなどが注目される。発表内容はフロアからの質疑の範囲を超えており、仔細で個別的な質問に止まった。

2. 音楽レパートリーの生成と個人の役割

オーストリアのロマ民族口ヴァーラを対象に

滝口幸子(お茶の水女子大学大学院)

(発表要旨)

本発表では、オーストリアに居住しているロマ民族サブ集団口ヴァーラを事例にあげて、個人の活動が音楽レパートリーの生成に果たす役割について考察している。ここで示す

個人とは、ロヴァーラの帰属者に限定したのではなく、ロヴァーラではないが彼らの音楽や活動に関与し、それらに何らかの影響を与えたとみなす者も広く含めている。

発表では、まず研究対象であるロヴァーラについて、彼らがオーストリアに定住するようになるまでの移動経路、伝統的な職業、音楽の特徴について説明し、ロヴァーラの音楽(=主に歌)が長い間集団内で口頭伝承されてきたこと、そのため音楽およびそれを演奏するコンテキストには、各国に分散して居住するロヴァーラ全体に共通した特徴が見られることを確認した。

1980年代後半になると、しかしオーストリアのロヴァーラの間では、伝承者として新たな意識を持ち、公の場で半ば職業的に演奏する者が登場するようになる。彼らの音楽文化にこのような変化が生じた背景として、ほぼ同時期に国内で始まったロマ自身による人権運動を中心とした民族運動および研究者のロマ文化に対する学術的関心の高まりからの影響を指摘することができる。とりわけ民族音楽学者U・ヘメテクの果たした役割は大きく、彼女がロヴァーラを中心に行った草の根的な研究活動は、最終的にロマの音楽の収集・記録に主眼をおいた3つの研究プロジェクトと、録音時間が合わせて745時間にもものぼる2つのコレクションの作成およびそれらのアーカイヴへの保管を実現させた。また、ヘメテクの応用音楽学的思想に基づいた活動は、民族運動の一環として音楽の公開演奏にも力を注ぐものであった。

コレクションのひとつ、ヘメテクによって収集された「ヘメテク・コレクション」の中で最も多くの録音資料が残され、後に半職業的な音楽家として独立しているロヴァーラ出身Rの音楽レパートリーとインタビュー資料を分析すると、Rは、ロヴァーラの「伝統的な」歌とみなす規準を、その歌詞内容がロヴァーラの過去の史実であるか否かに置いているものの、それはR個人の記憶や体験に大きく依存しており、Rとその

家族によって新しく創作されたと思われる作品さえ含まれていることなどが明らかになった。加えて、Rの音楽レパートリーや他のロヴァーラの音楽レパートリーには、互いに類似作品が少ないことも指摘できた。以上のことから、ロヴァーラの音楽の伝承研究に新たな見地を与えるであろう「個人」の音楽活動に目を向ける重要性を強調し、今回の発表では取り上げなかった集団外での活動を行わない「個人」にも注目する必要性を示して、本発表の結びとした。

(コメント・高松晃子)

音楽文化は民族やネーションといった集団を単位として語られることが多いが、個々のパフォーマンスを積み重ねて文化を形成するのは個人にほかならない。また、ある音楽文化に影響を与える「研究者」なる存在も、ひとりひとりの動きは決して一様ではないのだから、集団としてひとくりに論じるべきではない。滝口氏の発表を聞いて、ミクロな研究の重要性を改めて感じた。滝口氏は、オーストリアに居住するロマ民族の、さらにサブ集団のひとつであるロヴァーラ、さらにその中のひとりの歌い手に焦点を絞り、ある一人の研究者との相互作用を経て、歌い手のレパートリー生成過程を追った。さらに、滝口氏自身が一研究者としてそれを記述・分析するわけである。フロアからの質問にもあったように、突然にロヴァーラ文化を、ひいてはロマ文化を代表する立場に立たされた一歌い手は、一研究者の質問に対してそのつど答えを用意していく。それは時には信じ難いものかもしれないが、なぜその答えが選択されるのか。個人研究の面白さはここにあるだろう。

会員の声

世界遺産登録記念事業「丹生都比売神社史」

刊行記念シンポジウムのご案内

日 時: 平成21年3月28日(土) 午後1時

場 所: 高野山大学講堂

基調講演: 岡田荘司「高野山をめぐる神仏関係」

シンポジウム: 「神と仏の相和する社」

* パネリストのひとりとして遠藤徹氏が参加し、天野社で行われた舞楽の概要についてお話になるそうです。

参加方法: 事前申し込み制

事務局: 丹生都比売神社内 電話 0736-26-0102

〒649-7141 和歌山県伊都郡かつらぎ町上天野 230

詳細は、<http://www.niutsuhime.or.jp> をご覧下さい。

(近藤静乃)

演奏とお話による「宮城道雄尺八の世界」

宮城道雄の尺八重奏曲を中心に同時代の作曲家の尺八曲

との比較も含めて検証する会です。

日 時: 2009年4月22日(水) 午後6時30分

場 所: 宮城道雄記念館(東京都新宿区中町 35)

入場料: 2500円(要申込 03-3269-0208)

出演者: 藤原道山ほか

詳細は、<http://www.miyagikai.gr.jp/index.html> を御覧下さい。

(千葉優子)

第8回中日音楽比較国際フォーラムのお知らせ

中日音楽比較国際フォーラムは2年に一度行われる定期的な国際学術会議です。1995年からすでに7回開催され、第8回は2009年9月11日～15日南京師範大学にて行わ

れます(主催:南京師範大学、南京芸術大学)。フォーラムのテーマは中日両国の、音楽史比較研究、伝統音楽比較研究、音楽教育比較研究、音楽芸能比較研究、音楽創作比較研究です。このフォーラムに参加を希望する方は、日本語で、申込書(論文のタイトル、お名前、性別、勤務先、連絡先、電話番号、E-mail)とレジュメを、5月15日までに下記までお送りください。参加が確認された方には6月15日までに正式招待状をお送りします。正式招待が決まった方は、8月15日までにE-mailで論文をお送りください。なお、正式招待者の旅費は自己負担とし、フォーラム期間中の宿泊と食事は主催者が負担します。

連絡先: 中国・南京・宁海路 122 号

南京師範大学音楽学院 郵政番号: 210097

担当者: 俞子正(E-mail: opera1600@163.com)、

徐元勇(E-mail: xuyuanrongcn@yahoo.com.jp)

電話: 25-86309863・13601589683

(塚原康子)

会員の声 投稿募集

1. 次号締切: 2009年5月30日(6月初旬発行予定)

2. 原稿の送り先および送付方法:

学会本部事務所(郵送、Faxまたはメール)

〒110-0005 東京都台東区上野3-6-3 三春ビル 307号

Fax: 03-3832-5152 E-mail: LEN03210@nifty.com

3. 字数および書式: 25字×8行程度(投稿者名明記のこと)

4. 内容: 会員の皆様に知らせたいと思う情報

(1) 催し物・出版物などの情報

研究会、講演会、演奏会、CD、書籍出版、展示、見学会など、会員の皆様に知らせたいと思う情報。

(2) 学会への要望や質問

支部例会、大会、機関誌など、学会に対する感想や要望

* 原稿の採否は「支部だより」担当者にご一任下さい。編集の都合上、お送りいただいた原稿に多少手を加えさせていただくことがありますので、ご了承ください。

(東日本支部だより担当)

東日本支部からのお知らせ

新しい東日本支部体制が発足し、役割分担が決まりました。平成 20・21 年度は以下のメンバーで運営します。どうぞ宜しく御願います。

支部長：塚原康子

支部担当理事：岡崎淑子

経理：塚原康子、濱崎友絵

ホームページ：葛西周、山下正美

例会：[委員] 井上貴子、奥山けい子、マット・ギラン、熊沢彩子、高松晃子、谷口文和、前原恵美、早稲田みな子

[参事] 井土まりこ、大沼覚子、滝口幸子、

田村にしき、塚原健太、森真理子、吉岡三貴

支部だより：近藤静乃、鳥谷部輝彦、山下正美

発行：(社)東洋音楽学会東日本支部

編集：塚原康子、岡崎淑子

近藤静乃、鳥谷部輝彦、山下正美

〒110-8714 東京都台東区上野公園 12-8

東京芸術大学音楽学部楽理科 塚原研究室気付

Tel: 050-5525-2357・2350 Fax: 050-5525-2522

E-mail: tsukahar@ms.geidai.ac.jp (塚原)
